

よりに車のない時代でしたので歩くより外ありませんでしたが、歩く事そのものが楽しみでありレジャーであつたわけです。大型レジャー時代などといわれる昨今の旅行にくらべ、何と人間性優先のレジャーであつたことでしょう。

昭和五年頃、常磐線より下流霞ヶ浦への吐き出しまで八重桜が植えられました。五色桜と呼ばれ色とりどりの桜でしたが、昭和十三年、十六年の水害で壊滅したことは残念です。小学校六年を終わり旧制土中へ入学しました。当時土中に、赤いさくら、青のかすみ、緑のつくばという三雙のボートがありました。古い土中卒の人達には懐かしい思い出の多いボートです。春五月に校内各クラス対抗のボートレースがあり、四月はボートの練習で各クラスの選手は毎日しごかれたものです。

桜川へ上る事は風紀上厳しく禁止されておつたのですが、桜の花が白雲のようになびくの眺めては、つい桜川の方へ艇首が向つてしまいます。当時艇庫が今の観光ホテルの処にあり、川口川から桜川へ向うには、今のレックロッヂあたりから直線に桜川に入る細い堀割りがあ

りました。藤川団地の中央のわけですが、当時は全部荒地で「ヤワラ」と呼ばれた湿地帯でした。細い水路なのでオールが使えず、竿でこいで桜川へ向うわけですが、その間選手はオールをこぐのが休み、当然若い少年達は食欲の方で、当時一個二銭也のアンパンをかじつて堀割りを通りましたので、誰いうとなく、「アンパン海狭」という名がつけられ、桜川へ向うのを「アンパン海狭探険」という事になりました。

ヤワラの芦の中に、ヨシキリやバンの卵を見つけるのも、その時、鬼バスの白い花。河骨やおもだかの花、ネコ柳の芽の間を縫つて桜川に入り一気に虫掛橋まで漕ぎ上る。固定のシックスという今のレースボートとは程遠い不かつこうな艇でしたが、元気なコックスの号令で漕ぎだすのです。

土手の桜の散る中を進むボートを漕ぐ少年達は練習の苦しみを忘れ懸命にオールを引つぱつたものでした。当時の土中、今の一高の桜歌の一節

「春のやよいは桜川、その源の香をのせて、流れて浮かぶ花いかだ……」という事を現実味を味わぬながら、